

ホトトギス 昭和二十四年三月二十八日 通称者特別授承記第百一七号  
平成二十九年十一月二日発行 (第百二十卷第十一号)

# ホトトギス

十一月号



## 俳句随想〔四百二十五〕

汀子

これまで書かせて頂いた俳句随想は今回で四百二十五回を数える。その一部はPHP新書『俳句入門―初級から中級へ―』によって出版することが出来た。長く書かせていただいた「俳句随想」はホトトギスの指針として主宰の勉強の場でもあった。読んで下さる読者の皆様からのご意見も大変あり難く、参考にさせて頂いた。私も大切な「ホトトギス」の指針を過たないように、勉強し、読者の意見を大切に、時に、書くことに難渋し、時にこれだけではどうしても書かねばならないと、心を熱くして書いたこともある。自由に、書きたいことを書いたので、或いはご迷惑だったこともあったかも知れない。でも、私の心は読者の皆様に理解して頂き、沢山ご意見も頂戴した。私は今はホトトギスの名誉主宰として主宰の廣太郎に全てをまかせ、経営部門も全て任せて安心して立場になった。主宰は大変であるが、一生懸命努力して「経営面も私に心配させない努力をしている。

名誉主宰の稲畑汀子から主宰の廣太郎に、「俳句随想」をバトンタッチしようと思う。平成三十年一月号から、主宰―稲畑廣太郎の俳句随想となる。私も勉強して行きたい。

旬日記 汀子

平成二十八年十一月二日 ロイヤル俳壇

神渡とや東京に降り立ちし  
掃かず置く落葉樂しむ日々  
あり冬ぬくきことの油断にありしこと  
冬ぬくき今日も身軽に旅にあり  
冬ぬくし書齋の整理手つがずに  
十一月三日 下朝句会

凧に行手阻まれをりしとも  
集ふことすなはち小春日和かな  
たまはりし林檎みちのくよりのもの  
快晴はやはり文化の日なりけり  
十一月八日 大阪倶楽部

凧に出足挫かれをりし朝  
冬めくや浪花の街の人混に  
雨も又冬めく一日いざなへる  
大根を炊いて二日の旅に発つ  
渋滞を避けるすべなき冬の雨  
栞り置く木の葉掃き寄せ置く木の葉  
冬の雨 通行止めの高速路  
十一月八日 綿業倶楽部

漂ふと見せて大縮消えてをり  
風除にくつろぐ心生まれけり  
冬の雨一枚多く羽織り来し  
道迷ふことなく着きぬ冬の雨  
十二月十日 清交社

初時雨街うろろうと着きにけり  
冬日和このまま続くかも知れぬ

終の花の所在は問はずとも  
吹き荒るることも冬めく夕べかな  
今日よりは通行解除冬日和  
十一月十一日 工業倶楽部

ふり返る心となるも神無月  
ただよふは無限の大地大綿に  
何をして来しか問はるる神無月  
一日を旅に使ひぬ神無月  
十一月十五日 有恒俳句会  
落葉する又落葉する明るさよ  
十一月十五日 無名会

晴れてゆく早き冬めく早さかな  
冬めくといふこと忘れゆく家居  
一枚の木の葉を風が浚ひけり  
とり敢へず句帳に栞る木の葉かな  
冬めくや遊び心のなしとせず  
雨よりも風に木の葉の従へる  
十一月十六日 夏潮句会

尽くす日の近きも庭の落葉かな  
風止んで忽ち小春日和かな  
氣忙しき思ひ沈めて小六月  
庭師来しとは思はれぬ落葉かな  
掃くよりも落葉する庭なり小六月  
水音の中にも落葉する庭なり小六月  
暖房にぐんぐん解けて花氷  
十一月十七日 きさらぎ句会

炬開を一足早く山家かな  
その中に鶯らしきもみし庭木  
鶴かも知れぬ家居の庭そぞろ  
体調に心してゆく小六月  
寒くなる助走の如き朝かな

十一月十七日 アネモネ句会

これよりは散る楽しみの紅葉かな  
いかに冬乗り越えゆかかん心あり  
あるがまま冬を迎へてをりにけり  
京紅葉なにはの紅葉散り急ぐ  
明らかにくなき一日とふり返る  
十一月十九日 中国ホトトギス同人会  
旅出雲神帰る日も近きこと  
十一月二十日 中国ホトトギス俳句大会

日本海日和時雨を誘へる  
冬紅葉散る光陰の中にある  
日の差して時雨るる石見日和かな  
十一月二十五日 時雨句会

色尽し散るを堪へて冬紅葉  
甘く見てならぬ冬めく日なりけり  
皆集ふ冬めく一日といはずに  
冬めく日一寸先は闇といふ  
十一月二十六日 句会と講演の会

蹴散らして木の葉に心乗せてをり  
明日は又雨の予報や木の葉坂  
咳一つこぼして今日のみ始まりぬ  
山会 歴史 繕く神無月  
十一月二十九日 関西ホトトギス同人会

時雨虹消えし辺りを見逃さず  
あの辺り隠れ里あり時雨虹  
時雨虹見し目に湖の広さかな  
十一月三十日 関西ホトトギス俳句大会

冬湖のはるかへ心置く宿り  
全容の比良正面に湖の冬

# 廣太郎旬帳

廣太郎

平成二十八年十一月三日 蕉心会

父よりも子が釣れてをり黙の竿  
行秋を乗せて大川未来へと  
忌の近き蕉像の目の秋思かな  
萩揺れて羽音縮んでゆきにけり  
船音も楽を奏でて文化の日  
文化の日大東京の静けさに  
信濃より大秋晴を繋ぐ帰路  
信州の濃紅葉江戸の薄紅葉  
日表に恥ぢらつてゐる薄紅葉

十一月六日 野分会音屋例会

山茶花のほろと未来へ散りゆける  
故郷の十一月の山の黙  
富士白く十一月の空青く  
君偲ぶ十一月の聖歌かな  
十一月六日 青嵐会音屋例会  
大川の水の硬さや桃青忌  
芭蕉忌の芥流して隅田川  
鷹に空明け渡したる神慮かな  
鷹飛んで空引き攀つてをりにけり

十一月七日 刈谷市民俳句大会

神渡三河の空を掃き清め  
三河てふ親しき距離に冬来る

十一月八日 カトリック新聞選者吟

露の世の諸聖人てふ輝きに  
十一月八日 「あらうみ」 諸家近詠

寒の水汲んで考へ新たにす  
寒声の僧の若さでありにけり  
寒の内早く抜けねばならぬこと  
寒見舞気になることは言はずおく  
寒卵割れば未来の音がして  
十一月十日 土筆会

冬紅葉とは淡々とあはあはと  
鉄弾く低き日差に冬耕す  
徳川の庭を攻めたる鴨の陣  
水に浮くものを灯して冬紅葉  
その中に命鋤き込み冬耕す  
十一月十日 蕉心会三百回記念吟行会

芭蕉忌の句座雨男復活す  
芭蕉忌を使ひ切つたる記念句座  
さきたまの古代を秘めて蓮枯るる  
鷹現れてさきたまの空緊張す  
再会の句碑や冬ざれてはをらず  
大利根の風の存問芭蕉の忌  
十一月十四日 朝日カルチャー 若草句会

初冬や風の奏でる一行詩  
水音の固まつてゐるしよとかな  
祖父父母カメラずらりと七五三  
初冬の園丁箒手放せず

親右往左往袴着左往右往  
知事小春大統領は大嵐  
十一月十六日 北國文芸選者吟

初冬の花壇は赤を主張して  
十一月十七日 ひまわり俳壇選者吟

初富士を仰ぎ心の足るを知る  
十一月十七日 登高会

北窓を塞ぐより稿進みけり  
口切に茶室の空気入れ替はる  
北窓を塞ぎ心は閉ざさざる  
口切や亭主の所作の淀みなく  
北窓を塞ぎボジョレー抜きにけり  
十一月十九日 中国ホトトギス同人会、大会

古代蓮枯れて古代へ還りゆく  
昔日を語る銅劍山眠る  
分水嶺越えて神有月となる  
出雲路に神々集め冬ぬくし  
軍楽隊神有月を響かせて  
十一月二十日 若水句会

小六月ワイン好きでふ明治帝  
御神木鴉をさめて神の留守  
七五三引き攀つてゐる娘の笑顔  
神宮へ神有月の大社発ち  
十一月二十三日 目黒学園句会  
大地撥つて大根引きにけり  
マーチングバンド小春の空へ抜け

大根を洗ひし後の水閑か  
大根引地球の裏を凹ませて  
十字架に祈り勤勞感謝の日  
瀬戸の風干大根を輝かせ

十一月二十六日 ホトトギス社句会

黄落に大東京の塗り替はる  
木の葉散るこれで君とは終りです

十一月二十七日 青嵐会東京例会

点と咲き線と散りゆく冬桜  
冬ざれの芝公園に猫二匹  
電波塔天辺目差し木の葉舞ふ  
金色に光る大屋根神迎

十一月二十七日 野分会東京例会

ミヤンマーと化して十一月の寺  
赤々と十一月の庭となる  
山茶花の散りゆく刹那とは無限  
散り敷きてよりの山茶花日和かな

十一月二十九、三十日 関西ホトトギス同人会、大会

芭蕉忌の歳月語る墓石かな  
大綿や芭蕉の化身めく飛翔  
時雨雲飛行機雲が押し退けて  
運転を皆が心配冬うらら  
寒灯下ミディアムレアに近江牛

# 雑詠 廣太郎 選

残花なほ人を集めてをりにけり さいたま 岡安仁義

時折は残花に風のありもして 同

風に散る花にも遠き旅路あり 同

夏草の底に潜んでゐる歴史 岡山伴 明子

逃げて欲し入つて欲しと蟻地獄 同

万緑をさざなみとして広げけり 同

解禁の夜明けの磧 鮎 句 東京 今井千鶴子

鮎づくしいただきをれば通り雨 同

石段の下の暗みに茅の輪立つ 同

もつれてはならぬ鵜縄に火の粉散る 西宮 海輪久子

いつか鵜の味方になつてゐる鵜飼 同

夏山を大きく廻し出航す 同

ほつほつと陽炎ひ初めしわが齡 神戸 後藤比奈夫

糸遊の遊んでをりぬ草の上 同

母子草入りの餅なりいただかな 同

資生堂パーラーの午後メロン食ぶ 同

とは言へどやはりメロンに縁遠く 同

色つきのひよこをねだる夜店かな 同

葉末より葉末へこぼれ喜雨となる 東京 田丸千種

夏雲湧く芯に昏さをはらみつつ 同

埃積む虚子積年の蠅叩 同

瀬音聞くうちに山女の焼き上がる 龍ヶ崎 今橋真理子

子燕や端の一羽の気にかかり 同

泥こびりつく夕暮の田搔牛 同

河鹿川守りて町の古りにけり 袋井 湖東紀子

助手席に買ったばかりの夏帽子 同

街が好き人間が好き燕の子 同

讚美歌のごと睡蓮の開きけり 熊本 岩岡中正

対岸に用ある蛇の渡りゆく 同

枇杷熟れて山河たのしくなりにけり 同

夜店の娘ゲーテの詩集読んでをり 神戸 和田華凜

浮世絵の流し目と合ふ夜店かな 同

登山帽ふり風自在雲自在 同

葉桜の風小説の第二章 渋川 木暮陶句煎

雨はらふ翼さばきや夏つばめ 同

血のごとき子規の墨跡五月闇 同

空蟬の軽さ命の重さかな 神戸 涌羅由美

今日は聞き上手に徹し古扇 同

釣堀の水重さうに眠さうに 同

名園の静寂深めし蟻の道 東京 橋本くに彦

深川の旦那の粋や藍浴衣 同

全身のウエルダンへとなる暑さ 同

# 雑詠句評（十月号より）

さい雪・くに彦・雅  
霜衣・純也・公次  
佳乃・しげ人・仁義  
一步・廣太郎

## 弾き了へて大きな拍手薔薇を抱く 東京 今井千鶴子

どんな楽器を弾かれたのだろうか。演奏は素晴らしく、大きな拍手が大きな拍手が鳴りやまない。盛大な拍手の中で贈られた薔薇を胸に抱いて、深々と礼をしている奏者。無事弾き終えた達成感と感動。花束を抱いた胸の鼓動までが響いてくるようである。思わずこちらも拍手を送りたくなってくる。（さい雪）

ピアノ等のソロコンサート、或いは発表会かも知れないが、素晴らしい演奏に拍手喝采であった。演奏者は女性であるような想像も出来るが、演奏後渡された花束は薔薇であった。勿論花束にも色々あるのだが、やはり薔薇であるからこそ、演奏が素晴らしく情熱的であったと想像出来るのである。（廣太郎）

## せめて紅つけやり雛を流しけり 神戸 和田華凜

源氏物語など古典にしばしば登場する「ひいな」は、おそらく簡単な紙人形かあるいは小さな布を縫って着せたようなものであったかも知れない。もともと人間のかたちをした小さな人形は、当時身代わり信仰のひとつがた、かたしろとして扱われ、今でも祓いの思想が残っており人々のけがれを形代として雛にうつし流す風習がある。掲句はその雛流しである。「せめて紅つけやり」の表現で作者の雛によせるやさしい心情と共に、手作りの素朴な雛の姿までも想像される秀句である。（くに彦）

何とも心優しい雛流しの光景であろうか。筆者は実は実際雛流しをしているところを見た記憶はなく、家で三月三日に飾り、それが過ぎると大切に来年まで仕舞っていたが、本当は邪気を乗せて流すという習慣が目的であるという事だ。それでも雛との別れの辛さをひしひしと感じる句である。（廣太郎）〈以下略〉

天地有情

龜鳴いたさうな百寿の誕生日 神戸 後藤比奈夫  
 百歳をクリアしたる朝寝かな 同  
 虚子の齡近づき超えん明易き 長岡 安原 葉  
 何言はれても虚子信順や明易し 同  
 木の实植う日の本の明日信じつつ 東京 稲畑廣太郎  
 比良比叡裾を広げて春時雨 同  
 千本の一本づつの花の朝 相模原 木村享史  
 み吉野の花と別るる句帳閉づ 同  
 俳諧の一語大事に明易し 熊本 岩岡中正  
 人逝きて麦秋の野の遺さるる 同  
 父訪ひし初夏の砂丘を踏みしむる 吹田 大橋 暁  
 ひそやかに月見草咲く砂丘かな 同  
 深吉野の月影揺らす夜振かな 神戸 和田華凜  
 明珍の風鈴風を選びたる 同  
 親しめる庭の年月紫蘭かな 袋井 湖東紀子  
 又明日があると涼しき星仰ぐ 同  
 細き葉のひとつく銀の露 東京 今井肖子  
 秋措みけり風者の荒ければ 同

日子選

内緒てふ話筒抜け麻のれん 同 橋本くに彦  
 恋文の浴衣の袖をこぼれけり 同  
 學位記も修了証も黴びにけり 神戸 三村純也  
 鹿の子の跳ねてをらねば眠りゐる 同  
 薫風に背中押されて生きてをり 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 それぞれに薫風まとひ集ひきし 同  
 昼顔やホテルの敷地こころまで 東京 今井千鶴子  
 思はざる山家の昼餉鮎づくし 同  
 虹消ゆるまでわが思ひ語らざる 神戸 浜崎素粒子  
 葛桜話し相手の欲しいとき 同  
 梅雨蝶のメタセコイアをより高く 仙台 赤川誓城  
 記念樹と書かれ伸びゆく楡新樹 同  
 何もかも忘るる旅路風薫る 東京 山田閨子  
 鮎を釣る根気鮎釣見る根気 同  
 山茶花のこぼるごとく人逝きぬ 福山 竹下陶子  
 悠久の花鳥諷詠冬ぬくし 同  
 藤の花揺れぬし色の濃く止まり 熱海 嶋田一步  
 耐へ切れず落ちし雨粒藤の花 同